

## 資料から読み解く滋賀県の名工・西村嘉兵衛の石燈籠に関する研究

A study on the stone lanterns by Kahei Nishimura, a master mason from Shiga Prefecture

落合 知帆\*

Chiho OCHIAI

**Abstract:** The Hira Mountains located in the northern part of Otsu City, Shiga Prefecture, Japan used to be a granite producing area and it was widely used for “torii gates” and lanterns of shrines, basement stone of the houses, stone walls, and garden stones. The purpose of this study is to analyze the stone lanterns made by Kahei Nishimura, a well-known master mason in Minamikomatsu village, using 24 units of old documents related to his masonry found in this study. Based on these documents, a field survey to identify the Kahei’s lanterns, and interviews to local stonemason and gardeners, the major types of lantern produced, namely Rengeji, Kasuga lanterns or Okunoin followed by Rikyu and Yukimi from 1912-1948. These lanterns were sold mainly in the east side of Lake Biwa, such as Hikone, Notogawa, and Kosai areas, as well as the east side of the lake and Kyoto, and the distribution changed over time expanding to Konan-cho and Moriyama. By comparing the drawings in the old documents and actual lanterns made by Kahei, many patterns were engraved on the lanterns. This study results help to understand the conditions of the masonry that was flourished in the area, and the values of their work from the Meiji to the early Showa era.

**Keywords:** Stone Mason, Stone Lantern, Related Old Documents, Shiga Prefecture

**キーワード:** 石工, 石燈籠, 参考資料, 滋賀県

### 1. はじめに

滋賀県大津市の北部に位置する比良山系は、「木戸石」<sup>1)</sup>とよばれる白色の花崗岩の産地であり、京都の白川石に次ぐ銘石として知られ、神社の鳥居や燈籠、建築石材、石垣や庭石などに広く利用されてきた。明治8年(1875)にまとめられた「滋賀郡木戸村誌」には、木戸村の産物として御影石があげられ「質美ニシテ燈籠・嗽盤・其他石工ニ用ユ」<sup>1)</sup>とあり、製作された燈籠などの質が良かったことが分かる。また、明治13年(1880)にまとめられた「滋賀県物産誌」の湖西地域の木戸村の項には、物産として「石燈籠」や「石塔」などが挙げられ、「工」(工業を示す)の割合が大きく石材業が盛んだったことを示している<sup>2)</sup>。田井中は「木戸村・北比良村では集落において「工」の占める比率も高く、明治時代初めの滋賀県下で、この地域における石工の分布密度は群を抜いている。」<sup>3)</sup>という。

この地域でも特に大津市南小松地区(旧志賀町南小松村)の石工たちは、燈籠といった加工物を得意とし、多くの石工たちが庭園や民家の庭に置かれる多様な形の石燈籠を製作していたことが知られている<sup>4)</sup>。

石燈籠は仏教とともに日本に伝来し、仏堂や社殿の正面に配置されていた。その後、茶の湯の発展の影響を受け、民家の庭の明り取りや装飾品として置かれるようになったと言われている<sup>5)</sup>。これまで石燈籠に関しては、主に写真を用いながらその様式や意匠に関する研究が行われてきた<sup>6)</sup>。さらに、大きな寺院の庭園を対象に燈籠の配置や他の建物との位置関係に関する研究<sup>8)</sup>、石燈籠を庭の一要素として取り扱う調査<sup>9)</sup>がある。また、現代の名工に着目した書籍はあるが、製作された作品や道具等の紹介に留まっている<sup>10)</sup>。

このように石燈籠を製作した名工に着目し、その石工が製作した燈籠の種類、納品先、燈籠に用いられる文様等については、これまであまり研究がなされてこなかった。

そこで、本研究では、滋賀県志賀町南小松村出身で名工と謳わ

れた西村嘉兵衛と彼が作り出した燈籠について 1) 石工関連資料の発掘とその分析により、明治から昭和初期にかけて製作された石燈籠の種類やその納品先・方法を解明すること、2) 嘉兵衛作の燈籠の特定および燈籠に彫刻された文様の参考資料を特定することで、嘉兵衛燈籠の製作過程とその評価を考察することを目的とした。

### 2. 調査方法

本論では、西村嘉兵衛が製作した燈籠を確認する調査の過程で発見された資料、具体的には、「石材売上帳」(大正元年~昭和35年)、3冊の「灯籠寸法帳」(明治13年、昭和5年、昭和7年)、絵柄参考資料「絵本通寶志」や「四季花鳥図譜」等、合計24点から、西村嘉兵衛作の製作品目、納品先と輸送方法、嘉兵衛が参考にした、または記録した燈籠の種類、絵柄の内容を調査した。これらの資料は西村家から他家<sup>11)</sup>に渡っていたが、譲渡の過程が確認でき、かつ西村嘉兵衛の署名または社印が確認できたものを調査対象とした。表-1に調査対象とした西村家の石材業に関連する資料の概要を示す。また、写真-1に西村嘉兵衛の署名と社印を示す。

西村嘉兵衛が製作した石燈籠を「石材売上帳」および聞き取り調査をもとに、南小松地区の石材業者の協力のもと47点の燈籠の目視および実測調査を行い、数点を除き嘉兵衛作の燈籠であることを確定した。その後、嘉兵衛が燈籠に彫った文様の参考としていた資料を明らかにするため、上記に示した絵柄参考資料と石燈籠の文様の照合を行った。写真-2に嘉兵衛作と確定した奥の院燈籠と蓮華寺燈籠の事例を示す。また、写真-3に確認された西村嘉兵衛の資料と写真-4に明治13年「城燈寸法才割帳」を示す。

### 3. 西村嘉兵衛と嘉兵衛燈籠

#### (1) 西村嘉兵衛

西村嘉兵衛は滋賀の名工として知られ、彼の作り出す石燈籠は

\*京都大学大学院地球環境学堂

出来栄えが良く「嘉兵衛燈籠」と呼ばれ、その名は滋賀県内だけでなく京都や三重まで轟き、近江商人たちがこぞって注文したと知られている。嘉兵衛は三代からなり、初代嘉兵衛(1850-1915)は明治期を中心に活躍し、石燈籠の名工としての基礎を築いた。二代目嘉兵衛(1877-1936)は初代嘉兵衛の長男である嘉市郎が大正4年にその名を継ぎ、明治から大正にかけて活躍し、嘉兵衛燈籠の黄金期を築いたと言われている。嘉市郎には三人の弟がおり、卯吉は近江八幡へ、捨太郎と留吉は集落内の他家の養子となり石工として活躍した。そして、三代目嘉兵衛は嘉市郎の長男安市が昭和11年に名を継ぎ、昭和を中心に活動した<sup>12)</sup>。

## (2) 嘉兵衛燈籠の特徴

西村嘉兵衛作の燈籠であることを確認するため、南小松地区の石材業者、滋賀県内の造園業者や骨董業者、嘉兵衛燈籠の所有者への聞き取り調査を行い、いくつかの共通点を確認した。

1) 石質：地元の石材業者や住民によると、嘉兵衛の持山からは薄茶色で棘目(細粒)の硬い「赤石」が採れた<sup>13)</sup>。この細粒花崗岩は、当地で一般的な白色粗目花崗岩に比べて雲母も少なく硬質である。通常、燈籠は屋外に配置されるため、雨水に曝され風化するにも関わらず、嘉兵衛の燈籠は風化が少なく、現在でも細部まで美しい加工が確認できる。

2) 形態的特徴と技術：嘉兵衛燈籠の表面の肌質は滑らかでかつ細やかで、硬い石を叩いて製作したとは思えないほどである。また、奥の院燈籠では、宝珠の尖端や笠の蕨手の細工が緻密で、さらに、請花の張り、火袋の草花や仙人の細かい細工、中台に彫られた十二支の文様も細かく美しい。嘉兵衛の作る燈籠は全体のバランスや各部の割り付けがよく、他の作品に比べて高い技術を示している。

3) デザイン性：奥の院燈籠の中台には十二支の文様が施されているが、数匹のネズミが遊んでいるようなもの、一匹のネズミと米俵が描かれたもの、母犬が子犬に乳をあげているものなど嘉兵衛のデザイン性の高さと遊び心が覗える。また、火袋に彫られた仙人のデザインも燈籠によって異なり、仙人の腕部分は透かし張りがなされているなど細部に技術を駆使したものとなっている。

## (3) 嘉兵衛燈籠の知名度

明治から昭和の初期にかけての嘉兵衛に対する世間での知名度はどの程度のものであったのか。西村家には「東宮殿下御成婚奉祝萬國博覧會参加五十年記念博覧會」の出品記念の賞状が残されている。この博覧會はその名の通り、皇太子(後の昭和天皇)のご成婚とパリ万博参加から50年を記念して大正13年(1924)に開催され、北海道を含め37府県および台湾、朝鮮、満州、関東州など各地から名産品が出品されている。当初は、日本産業協会の事業として計画されていたが、関東大震災の影響を受け中止されたが、京都市がそれを継承し、平安神宮の南側に当たる一角で実施されたものである。

この博覧會の會誌を確認すると、滋賀県からは長浜縮緬、蚊帳、信楽焼、彦根仏壇などが出品された。嘉兵衛が手掛けた春日燈籠は、滋賀県の欄には掲載されず、「館出品者之部」と「館出品之部」の双方に「滋賀 春日燈籠 滋賀郡南小松村 西村嘉兵衛」と確認できる<sup>14)</sup>。石燈籠は、京都の北野神社鳥居前や祇園花見小路の業者、八東郡来待村の業者、そして西村嘉兵衛のみであった。このことから、大正時代には、嘉兵衛燈籠は滋賀県内のみならず、全国に知られる存在となっていたことが推察される。

また、近年では、慶応元年創業で鈍穴流開祖・勝元宗益の流れを継ぐ滋賀県の造園業者の著書「秘伝・鈍穴流「花文」の庭」<sup>15)</sup>にて、嘉兵衛燈籠は加工も秀逸であり最高級品であると高く評価されている。

通常、民家の庭に設置される燈籠に石工の銘が入ることはない。今回の調査で確認した燈籠や水鉢についても同じであり、これが

今日まで特定の石工に関する研究が積極的に行われてこなかった理由とも考えられる。これまでに嘉兵衛作の奥の院燈籠の火袋上部、火袋と笠の場合に銘が彫られていたことが確認されているが、全ての燈籠に銘が彫られているわけではない。本調査で確認できた嘉兵衛の銘が刻まれていたものは、燈籠2本(南小松地区の八幡神社内)と水鉢1つ(三重県伊賀市内の民家の庭)でのみであった。一方で、嘉兵衛燈籠は上記した石質、全体的なバランス、加工や文様のパターンや細かい細工から判断し、ある程度特定することが可能である。

## 4. 資料からみる嘉兵衛燈籠の品目と納品先

### (1) 売上帳の記載

大正元年から昭和35年にかけて付けられた石材売上帳をもとに、大正元年から昭和23年<sup>16)</sup>までに製作された燈籠の種類と個数、単価、納品先を5年毎にまとめ示した(表-2)。

1) 嘉兵衛燈籠の種類：蓮華寺燈籠が最も多く72本、次いで春日燈籠または奥の院燈籠が41本、利休燈籠が31本、雪見燈籠は22本であった。その他に分類したのは鶯鷺燈籠、狛犬や狐、五重・三重塔、ナツメ、カエルや牛、火袋の交換などがあった。図-1に大正期と昭和期に製作された燈籠の種類と本数を比較したものを示す。大正期には上記4種類の燈籠が主に製作されていたが、昭和期に入るとその他に分類したナツメ、動物や五重・三重塔など多様になり、さらに白の注文が昭和16年以降多くなっていた。昭和11年に二代目嘉兵衛が亡くなり三代目になったこと、既に石材の枯渇が始まっていたこと、また昭和14年からは第二次世界大戦が始まり働き手が軍隊に取られ、さらには燈籠の買い手も減少したことなどが昭和16年以降の燈籠の種類や個数に影響したと考えられる。さらに、昭和19年からは石材加工だけでなく月給や手取りが記載されており、職人を派遣または自らも給与を受け取る作業を行っていた可能性がある。当時は土木工事のための間知石の製作などに当地の多くの石工が携わっていたとされることから、戦時中の苦しい状況下で燈籠製作以外の作業を行っていた可能性が見て取れる。

2) 燈籠の価格：蓮華寺燈籠の価格は、大正元年から大正6年までは約40円前後だったが、大正7年以降は50円~70円の値が付いており多少高くなっていたことが読み取れる。一方、春日燈籠および奥の院燈籠については、春日燈籠か奥の院燈籠の記載が統一されておらず一概には言えないが、春日燈籠は約40円~70円、奥の院燈籠は250円~500円前後の値が付いていたことが分かった。これを現在の価値に直すと数十万円<sup>17)</sup>に相当するため、一般の家では買うことが出来なかった<sup>4)</sup>、一方でその多くが近江商人邸などに現存している。さらに、大正13年の京都博覧會への出品以降、蓮華寺燈籠は100円以上に、利休燈籠も70円~100円と以前に比べ高値になっていることが確認できた。

3) 嘉兵衛燈籠の納品先：彦根が一番多く21本、次いで能登川15本、湖西地域(旧志賀町および高島市)と八日市が8本であった。その他には、近江八幡、五箇荘、蒲生、甲南町、甲賀町、京都などに販売されていた。これが昭和期になると、湖西地域(主に旧志賀町内)が一番多く41本、甲南町30本、彦根と守山が14本と変化していた。また、その他には甲賀町、京都、五箇荘、舞鶴、伊賀、能登川、愛知川などさらに広範囲になっていることが確認できた。

図-2に大正期と昭和期の燈籠の納品先を示す(不明を除く)。納品先は民家である場合と、彦根のようにその多くが地元の石材業者に渡っていた場合や、甲南町のように造園業者に謝礼が払われている場合などがある事が分かった。彦根の石材業者には明治期の「石材買上帳」が残っており、そこには嘉兵衛作の燈籠のみ製作者が記されていることから、当時から湖東地域においてその名が知られていたことが推察される。

表-1 確認された嘉兵衛所有の資料

種類	概要	点数
売上台帳	大正元年から昭和 38 年までの納品先, 商品名, 金額等	1
燈籠寸法帳	明治 13 年, 昭和 5 年, 昭和 7 年	3
絵柄参考資料	江戸時代発行の絵本通寶志, 増補諸宗佛像圖彙, 四季花鳥図譜等	18
その他	糸模様帳, 改算記日用車等	2

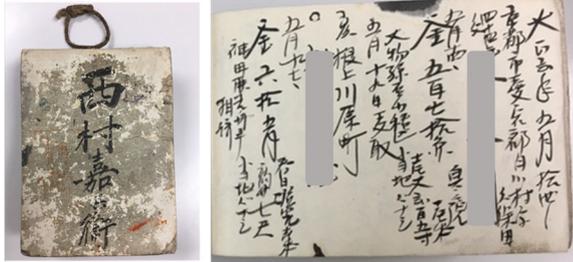


写真-3 確認された西村嘉兵衛の資料 (左 2 点「売上台帳」)  
\*個人名は個人情報の観点から伏せて示す。

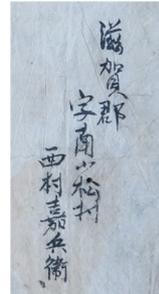


写真-1 石工の署名と社印



写真-2 奥の院燈籠と蓮華寺燈籠

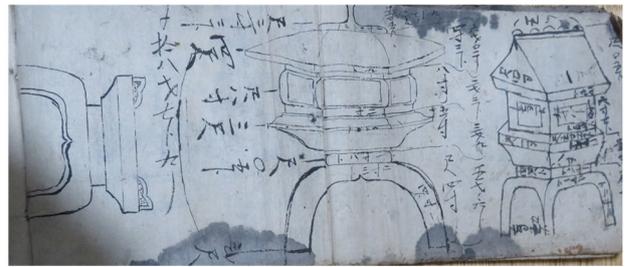


写真-4 「絵柄参考資料」(左), 明治 13 年 城燈寸法才割帳 (表紙, 蓮華寺燈籠, 雪見燈籠, 草屋燈籠) (中央・右)



絵本通寶志の鉄拐先生



奥の院燈籠 (京都市)



絵本通寶志の候先生



奥の院燈籠 (日野町)



絵本通寶志の董伯華



奥の院燈籠 (甲南町)



絵本通寶志の寅



奥の院燈籠 (長浜市)

写真-5 絵本資料と燈籠柄の比較

石材売上帳の納品先の一部には、「〇〇(名前)の船にて」や、汽車という記載やその運賃が記載されていた。その情報をもとに図-3に納品先と運搬手段を示した。比良山麓の集落から湖東地域へは柴や葦などが船によって運ばれていたことが知られているが、石燈籠も同じく南小松地区または近隣地区から船で湖東地域の各所に運搬されていたことが分かる。また、大正後期や昭和に入ると汽車や自動車での運搬も行われるようになり、より遠い京都府舞鶴や三重県伊賀地域へも販売されるようになっていった。

また、三重県伊賀地域に納品された蓮華寺(466 匁(キログラム))と二尺五寸の雪見(143 匁)には燈籠の重さが記載されており、輸送の際に必要な情報だったのではないかと推察される。

さらに、前述した「東宮殿下御成婚奉祝 萬國博覧會参加五十年記念博覧會」の出品に関して、石材売上帳によれば、「大正拾貳年博覧會行 奥之院 九尺七寸 壺本、同じく八尺五分 壺本、利久 壺本」という記載があることから、これらの燈籠は大正12年に製作されおり、奥の院燈籠2本と利久燈籠1本が現地に運ばれたこと、また後にこれらが長浜と京都の民家に納品されたことが分かった。

## (2) 燈籠寸法才割帳の記載

本調査では、3冊の燈籠寸法才割帳をそれぞれ別の場所から発見した。西村嘉兵衛の名と「明治十三年辰吉日」と書かれたものが最も古く、初代嘉兵衛が30歳の時のものである(写真-4)。この帳面には、燈籠の絵図に各部の詳細な寸法が書かれたものと、燈籠の各部の寸法や笠を基準とした比率などを数字で記載したものの双方が示されている。描かれていた燈籠等は27種類あり、具体的には、雪見、草屋、利久、蘭溪燈、五重塔、三重塔、蓮華寺、遠州形、榎木形、織部、善導寺、水鉢、また、村内にある鳥居や燈籠も含まれていた。表紙には「明治十三年」とあるが、最後の頁には「明治四十四年二月仕上」と納品先が書かれた水鉢の絵図があることから、30年間に書き溜められたものと推察できる。加えてその根拠として、同じ燈籠でも寸法が違うものが何度か描かれていること、日付と納品先の住所や氏名が記載されているものがあることが挙げられる。また、これらの絵図には村内にある神社の鳥居や江戸時代に製作された燈籠も含まれていることから、自らの記録や研究と納品した作品の記録の双方を兼ねていたと考えられる。

明治13年の寸法才割帳の最後の頁には、「明治四拾貳年、九尺五寸の春日燈籠」の各部の加工にかかった日数と担当者の名前が記されている。ここには春日燈籠と書かれているが、中台の部分に十二支とあることから、これは奥の院燈籠に関する分担だと読める。加工にかかった日数は3人が作業を行って「合計百七拾五人半」となっており、実際の日付を見ると7月~10月にかけて作業が行われている。分担表には、嘉市郎(長男、後に二代目嘉兵衛)、三男(捨太郎)と四男(留吉)の名が示されている。これによると、嘉市郎が奥の院燈籠の最も特徴的な宝珠、笠や竿を担当し、三男の捨太郎が火袋や基礎を、四男の留吉が中台の十二支の加工を行っている。これまで推測で語られてきた親子が共同して一本の燈籠の加工に携わっていたことを示すだけでなく、兄弟がそれぞれの部位を担当し、共同で燈籠を製作していたことを示す貴重な資料である。また、これは初代嘉兵衛が52歳、二代目が32歳という全盛期の仕事を示すものでもある。

その他2冊は、昭和5年「燈籠寸法控帳」(小村留吉(当時36歳)二代目嘉兵衛の弟)と昭和7年「各種燈籠寸法帖」(西村嘉兵衛)である。昭和7年当時、二代目西村嘉兵衛は55歳、三代目西村嘉兵衛は26歳で小村留吉とも年齢が近かったこと、寸法帖の中に昭和9年に三代目嘉兵衛によって製作されたとされる狐の絵図と詳細な寸法が記されていることから、昭和7年の寸法帖は三代目西村嘉兵衛のものではないかと推察される。この寸法帖は、明治13年の内容の多くを模写しているが、羅生門形、竹虎形や諫鼓形など装飾が派手な燈籠や狐などが加えられていた。一方、昭和

5年の寸法控帳には、明治十三年の寸法才割帳からの模写であると考えられる燈籠の絵図に加えて、角蓮華寺形、紀佐多形、明神形、西野屋形、御室形のような寺院等に用いられるような燈籠や、三州形、桃山形、丸雪見形や汐見形置燈籠など庭園や民家の庭に好まれたであろう燈籠が描かれている。

## (3) 絵本通寶志等に描かれた内容

本調査で見つかった18点もの絵柄図参考資料であるが、その多くが江戸時代に発行されたもの、またはその後増版されたもので、増補諸宗佛像圖彙(巻~伍巻)には菩薩、仏薬師、七観音や有名な僧侶などが描かれている。一方「絵本通寶志(五と七巻)」、「本朝書林卷之上」には中国の仙人や日本の武士が、「絵本通寶志(六巻)」や「四季花鳥図譜」には鳥や動物が描かれている。例えば、「絵本写生獸圖画」には、主に植物が描かれているが、「正徳五巳未年霜月新板、寛政六申寅年霜月再刻」とあり、大阪や京都の出版元の住所と氏名が印刷されている。これらの資料の多くは江戸から明治にかけて広く普及していたと考えられる(表-2)。多くの資料は使い込まれていて表紙の破れや欠落が多い。同様の資料は同地区の他の石工の家にも残っていることから、当時これらの資料が燈籠の文様の参考として使用されていたことが推察できる。

また、「絵本写生獸圖画」には初代嘉兵衛の父親である西村安右衛門の名が記されており、初代嘉兵衛は嘉永3年生まれであることから、この資料によりこれまで知られていなかったが西村家が江戸時代から石工業に携わっていたことを証明する貴重な資料となる。また、「絵本寫寶袋」には西村嘉兵衛の名の横に嘉市郎の名が後から加えられ、二世代分の名が記されていることから、これらの資料が受け継がれていたことが分かった。

## (4) 火袋および中台の文様

奥の院燈籠は、嘉兵衛による細工と石工の技量が最も示された燈籠であると知られている<sup>4)</sup>。特に火袋に彫られた仙人や動物、中台の十二支にその特徴を見ることが出来る。一方で、これまではこれらの彫刻が何を参考に作られていたのかについて語られることは無かった。そこで本調査では、今回発見された資料に描かれた絵柄と実際の嘉兵衛作の燈籠に彫られた文様を比較し、彫刻された文様の参考元を調査した。その結果、「絵本通寶志(五)」「絵本寫寶袋(七)」と「諸職画鑑全」に描かれている仙人など(鉄拐、候、董伯華、通玄、陳楠、上帝)7点の人物が奥の院燈籠の火袋に彫られているものとほぼ同一であると特定した。これら仙人の柄は、江戸時代から明治にかけて祭りの屋台などにも彫刻されており、各地で資料として用いられていた可能性が高い。

また、「寫生獸圖書(上)」や「絵本通寶志(六)」には、牛、寅、兎、龍、猪、犬、猿、馬、羊、鹿、鯉、獅子、鳳凰、鳥などの動物、茄子や草花なども描かれており、奥の院燈籠の中台部分に用いられる十二支、蓮華寺燈籠の中台や利久燈籠の火袋部分に施された文様、さらには四角水鉢に彫られた龍と寅など、多くがこれらの資料を参考にして製作されていたことが分かった。写真-5に絵柄参考資料の仙人図および寅図と奥の院燈籠の彫刻部分の比較を示す。

## 5. 考察

1) 西村嘉兵衛の評価：明治から昭和初期にかけての西村嘉兵衛の知名度については、これまでの口伝に基づいた情報に加えて、「東宮殿下御成婚奉祝 萬國博覧會参加五十年記念博覧會」への出品という実績を明らかにしたことにより、滋賀県内だけでなく全国に広がっていることを証明することが出来た。また、聞き取り調査を行った石材業者、造園業者または所有者の多くが、嘉兵衛燈籠の価値を認識していた一方で、次世代は燈籠に興味を持っておらず、その情報や価値はほとんど伝わっていないため、今後

表-2 売上台帳に記載された販売先、燈籠の種類、単価

販売場所	種類	数	単価 (円)
<b>大正元年~大正5年</b>			
近江八幡・湖西地域・能登川・彦根・蒲生・八日市	蓮華寺	15	25-76
京都・彦根・能登川・近江八幡・蒲生・八日市	春日・奥の院	9	40-570
八日市・近江八幡・京都・彦根	利久**	6	18-22
能登川	雪見	5	45-60
湖西・五ヶ荘・彦根・能登川・近江八幡・不明	その他 (六角火袋, 空輪, ナツメ, 日カキ燈, クド石等)	19	2-180
<b>大正6年~10年</b>			
彦根・八日市・五箇荘・甲賀	蓮華寺	18	38-180
彦根・蒲生・八日市・不明	春日・奥の院	8	82-570
彦根・甲賀・八日市	利久	9	22-80
能登川	雪見	1	55
五箇荘・湖西・不明	その他 (狛犬, クズ屋, 塔, ウガジン, 丸置等)	11	9-360
<b>大正11年~15年</b>			
八日市・彦根・湖西・甲南・不明	蓮華寺	8	90-150
京都博覧会・彦根・甲賀	春日・奥の院 (後に売却)	5	190-780
近江八幡・彦根・京都博覧会・甲南	利久・利久 (後に売却)	4	70-90
甲賀	雪見	1	190
甲賀・湖西	その他 (修復分, 子丑)	4	3-35
<b>昭和2年~6年</b>			
甲南・彦根	蓮華寺	5	80-140
甲南	春日・奥の院	4	285-700
甲南	利久	1	40
伊賀・甲南	雪見	5	80-140
甲南	その他 (ナツメ, 伽藍石, 角鉢, カエル, 白等)	13	5-300
<b>昭和7年~11年</b>			
甲南・彦根・京都・能登川・近江八幡・甲賀・湖西・不明	蓮華寺	14	65-150
伊賀・甲南・京都・愛知川・湖西	春日・奥の院	8	250-600
彦根・五箇荘・甲賀・湖西	利久	5	40-150
彦根・甲賀町・京都・湖西	雪見	5	50-120
甲南・八日市・五箇荘・彦根・湖西・能登川・京都	その他 (カエル, ナツメ, 狐, 牛, 六本足, 五重・三重塔, 狐, 瀟鷲等)	20	6-550
<b>昭和12年~16年</b>			
彦根・守山・能登川・湖西・不明	蓮華寺	9	100-150
愛知郡・守山・彦根・湖西・不明	春日・奥の院	5	215-400
能登川・彦根・守山	利久	4	65-100
守山・不明	雪見	4	45-80
甲賀・彦根・甲南・守山・湖西	その他 (置燈籠, 瀟鷲, 三重塔, タカ, ナツメ, 白等)	21	3-290
<b>昭和17年~21年</b>			
湖西地域・不明	蓮華寺	3	155-230
湖西	春日・奥の院	1	600
湖西	利久	2	110-130
湖西	雪見	2	70-100
湖西・甲南・守山・舞鶴・京都	その他 (吉御形, 置燈籠, 地藏さん, 不動, 日神明, ホ, テル門標白x19等)	27	13-550
不明 (ホテル)	人手間賃	6	39-116
<b>昭和22年~23年</b> *昭和24年以降に燈籠等の製作が無く、手間賃となるので除く			
不明	雪見	1	2100
舞鶴・湖西	その他 (水鉢, カエル, タカ, 置燈籠, 石碑, 白等)	15	90-2500
不明 (ホテル)	人手間賃 (月給や手取り等)	7	523-1560

\*不明：文字の解読が出来なかった、または販売先の氏名のみ記載され、住所が示されていない場合に不明とした。\*\*原文のまま「利久」と記載する。

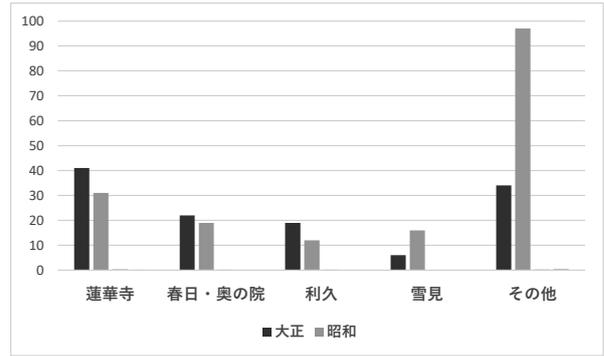


図-1 大正期と昭和期に販売された燈籠の種類

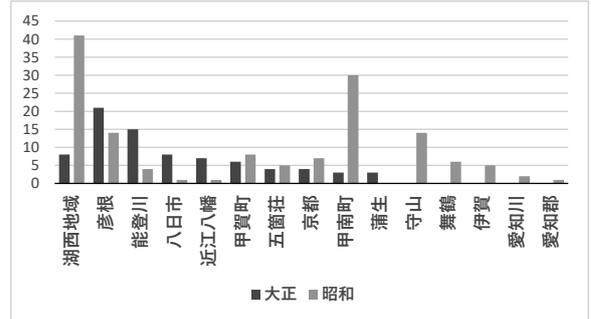


図-2 大正期と昭和期に製作された燈籠の販売先

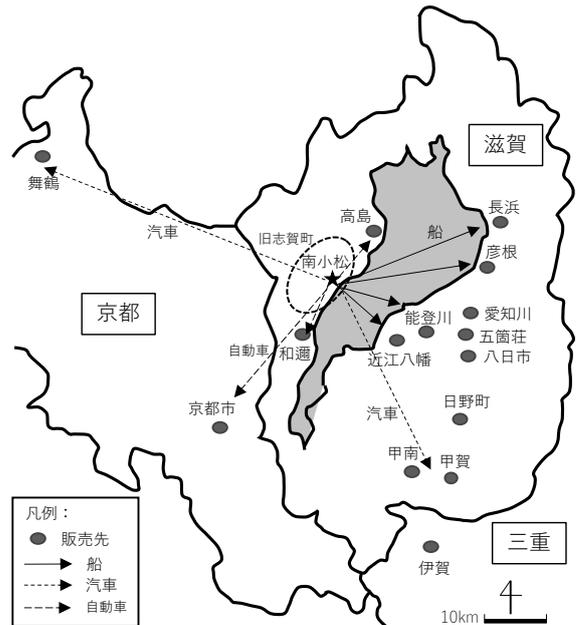


図-3 嘉兵衛燈籠の分布

の適切な保存や正当な価値づけを急ぐ必要がある事が分かった。

2) 嘉兵衛燈籠の種類と価格：大正元年から昭和23年の37年間の石材売上台帳からは、蓮華寺燈籠が最も多く製作され、次いで春日燈籠または奥の院燈籠、利久燈籠や雪見燈籠であったことが分かった。春日燈籠および奥の院燈籠の金額は250円~500円前後と当時としては高額であったが、それに比べると蓮華寺燈籠や利久燈籠は20円~80円前後と大きな違いがあった。また、蓮華寺燈籠は、六尺(高さ1.8m)と大きさが手頃で、水鉢の近くに置き灯りをとすにも実用的だったことから広く購入されていたと考えられる。場所によっては、民家の庭に2本の蓮華寺燈籠が設置されていることもあった。一方、奥の院燈籠は平均が八尺(高さ2.4m)と大きく、庭の中心に据えられることが多く、大きな庭を必要とした。こちらは現在の価値でいうと数百万円は下らず高価

であったにも関わらず、年に1~2本が製作されており人気があったと考えられる。燈籠調査でも、奥の院燈籠の所有者は近江商人や庄屋など当時、経済的にも余裕があり、大きな庭を有している場合が多かった。このことから湖東地域に住む近江商人らが嘉兵衛の高い技術や独自性を評価し、購入していたと考えられる。さらに、大正12年の京都博覧会への出品以降、燈籠の金額が上がっていることから、嘉兵衛の知名度が上がり、燈籠の価値および値段も上がったものと推測できる。また、時代を経るにつれて製作する品目に変化があり、これは石工の技術的な問題や石材の枯渇に加え、戦争という時代背景から石工関係者（掘り出し、加工、運搬等）や買い手の状況などが大きく関係していたであろうことも分かってきた。

3) 販売先の分布と方法：嘉兵衛作の燈籠は「嘉兵衛燈籠」と呼ばれ湖東地域に広く販売されていたことは地域住民の間でも多く語られていたが、売上帳という資料をもとに、彦根、能登川および湖西地域（旧志賀町および高島市）を中心としながらも、八日市、近江八幡、五箇荘、蒲生、甲南町、甲賀町、守山、京都など広い範囲に納品されていたことや、時代によって納品先に変化があったことを明らかにすることが出来たことは新たな発見となった。また、納品先は民家だけでなく、石材業者や造園業者の場合もあり、これらの業者から民家へと納品される仕組みが作られていたと考えられる。

また燈籠の運搬方法も場所や時代に応じて船、汽車、自動車など多様な方法が使われ変化していた。聞き取り調査によると、燈籠は宝珠、笠、火袋、中台、竿といったように各部に分けることが出来るため、これらの部位をそれぞれ固定し、慎重に輸送していた。燈籠は大きなもので3mほどもあるが、奥の院燈籠の宝珠の先端の直径は約5cm、長さ約20cmと繊細なつくりとなっていたため、運び出しや船積みにも技術が必要だったことがうかがえる。

4) 燈籠の製作過程：本調査で見つかった燈籠寸法割帳は明治初期から昭和初期にかけてどのような燈籠があり、また何が製作されていたのかを知る貴重な資料である。かつては燈籠の寸法や比率は各石工の秘密とされていたことから、このような寸法帳は家族間でのみで共有され伝えられていたとも推察できる。本調査で西村家から村内の他家に養子に出た三男も明治13年作成の寸法帳を参考に写しが作られた部分もあるが、燈籠の詳細な寸法や割り付けに関しては記述が無い。これと対照的に三代目嘉兵衛の寸法帳は明治13年作成のものをほぼ全て写し取っており、情報の共有がある程度制限されていた可能性がある。一方で、明治13年作成の寸法帳の最後に記載された九尺五寸の春日燈籠の仕事分担表には、兄弟が分担して一本の燈籠の加工に携わっていたことを初代嘉兵衛が示したと考えられ、貴重な資料である。また、当時の各部の加工工程や日数を把握できたことで、当時の加工スピードや作業分担の仕組みを理解する一助となる。

5) 燈籠製作の参考資料とその再現：本調査で見つかった18点もの絵柄参考資料と実際の燈籠との照合により、これらの絵本が江戸時代から昭和初期にかけて広く読まれ、燈籠の文様の参考になっていたことを明らかにした。特に奥の院燈籠の火袋や中台に彫られていた仙人や十二支等が絵本通寶志等を参考に作り出されていたことが分かったことは今後の燈籠研究に寄与するところが大きいと思われる。これらの絵柄資料に描かれている人物や動物は実に多様でかつ活動的で、この表現の影響が燈籠の彫刻にも見て取ることが出来る。嘉兵衛の燈籠を近くで見ると例えば乳をのませる母犬の横で2匹の子犬が遊んでいたり、母猿が子猿に柿を分け与えているなど一つ一つの文様の表情に愛らしさを感じる。これらの彫刻から嘉兵衛の遊び心や造形的に優れた能力を読み取ることが出来る。加えて、嘉兵衛をはじめ燈籠の加工を得意とした石工たちは、平面の絵柄を参考にしながら立体の彫り物として完

成させることができる空間認知能力にも優れていたと考えられる。さらに、仙人の体と腕の間には5mmの隙間が削り出され、仙人の髪の毛一本一本が表現され、猪や蛇の目目で彫られていることから、当時、高い立体構力と加工技術の双方を持ち合わせていたことにより嘉兵衛燈籠は高く評価されていたと考えられる。

## 6. 結論

本調査では、発見された西村嘉兵衛の名が記された石工関連の資料を分析することで、嘉兵衛は蓮華寺燈籠や奥の院燈籠を中心に様々な石燈籠や水鉢等を製作し、それらは湖西地域のみならず湖東地域の各地、京都や三重など広い地域に船や汽車、自動車を使用し納品されていたことを明らかにした。また、明治から昭和初期にかけての嘉兵衛燈籠の製作過程や評価を明らかにすることが出来た。さらに、滋賀県内や京都市内に現存していた西村嘉兵衛作の燈籠を確定し、燈籠寸法帳や絵柄参考資料に描かれた内容と比較や照合したことで、燈籠に施された文様の参考資料を特定し、多彩な文様や緻密な加工を可能とする加工技術の高さや独自性を明らかにした。これらの資料の発見や研究成果は、近代から現代にかけて地域産業を支えた石材業や石工の実態を明らかにするうえで貴重な資料となる。

謝辞：本研究は、人間文化研究機構総合地球環境学研究所のプロジェクト番号14200103の一環として行った。資料提供およびご協力頂いた津南市南小松地区および蒲生郡日野町の関係者の皆様に感謝の意を示します。

## 補注及び引用文献：

- 1) 志賀町史編集委員会編（1999）：志賀町史 57-58
- 2) 滋賀県編（明治年間）：滋賀県物産誌 巻之1 滋賀群：滋賀県、169-188
- 3) 田井中洋介（2007）：近江の石工たち-江戸時代後期を中心に-：滋賀県立安土城考古博物館紀要第15号、1-8
- 4) 石材業者、造園業者、骨董収集家、地元住民を対象とした聞き取り調査による。
- 5) 福地謙二郎（1985）：日本の石燈籠：理工学社、89-302
- 6) 天沼俊一（1933）：石燈籠：スズカケ出版部、2-132
- 7) 川勝政太郎（1984）：燈籠・手水鉢：誠文堂新光社、1-147
- 8) 平澤麻衣子（2005）：平等院醍醐における燈籠の配置に関する研究：ランドスケープ研究 68(5)、365-368
- 9) 特定非営利活動法人まちづくり役場（2014）：ながはまのお庭 第1-4号
- 10) 西村金造・大橋 治三（1991）：西村金造作品集：毎日新聞社
- 11) 当代の西村家が保管していた「石売上台帳」および「絵本通寶志」、「増補諸宗佛像圖彙」、「四季花鳥図譜」など合計14点は、骨董品業を営む個人に渡った後、2021年に滋賀県立琵琶湖博物館に寄贈された。また、「燈籠寸法帳」2点および「絵本通寶志」、「増補諸宗佛像圖彙」、「寫生動物書上」など合計9点は、津南市南小松地区でかつて石材業を営んでいた個人が、「燈籠寸法帳」1点は2代目嘉兵衛の弟の子孫が保有している。
- 12) 平出直厚（2012）：嘉兵衛灯籠（「石」動かぬ歴史・風土）：たねや近江文庫、25-27
- 13) 近江日野商人ふるさと館「日山中正吉邸」（2015）：温故知新：広報ひの、18
- 14) 博覧會出版協會（1924）：東京殿下御成婚奉祝萬國博覧會参加五十年記念博覧會誌
- 15) 近藤三雄・山村文志郎・山村真司（2019）：秘伝・鈍穴流「花文」の庭：誠文堂新光社、290-323
- 16) 分析の対象を昭和23年までとしたのは、これ以後は燈籠や水鉢などの製作はほとんど無く、手間賃や日当を受け取る仕事に従事していたと判断される記載が多くを占めたためである。
- 17) 企業物価指数（戦前基準指数）は、大正2年（0.647）で令和2年（675.7）のため、約1,044倍となる。これを蓮華寺燈籠40円に当てはめると約41,760円、奥の院燈籠500円では約522,000円となる。日本銀行ウェブサイト：2021年11月25日アクセス：(https://www.boj.or.jp/announcements/education/oshiete/history/fj12.htm)

(2021.9.25受付, 2022.3.30受理)